

## D. F. Krill による実存主義ソーシャルワークにおける「場」の概念の再検討

### —その本来的なあり方の追求—

田嶋 英行\*

Donald F. Krill による実存主義ソーシャルワークは、自らの「存在の意味」を把握することができずに自己が不安定な状態にあるクライアントを援助するために展開された援助枠組みである。したがってそれは、クライアントという存在者の存在を解明しようとする存在論的 (ontologisch) な次元になければならない。しかし実際には、とりわけそれにおける「場」の概念は、彼らが「いかにあるか」を問う存在的 (ontisch) な次元に止まっている。なぜなら Krill 自身が、その概念の基盤に据えた「世界内存在 (In-der-Welt-sein)」を、提唱者である Martin Heidegger による見解に沿って忠実に摂取できていないからである。本稿ではとくにその「場」の概念に焦点を当て、存在的な次元にあると考えられる Robert Kahn と Toni Antonucci による「コンボイ」概念と比較することによって、Krill によるものがそれと同じ次元にあることを明らかにする。次に Krill における「場」の概念がその次元に止まっている理由を、Heidegger 自身による「世界内存在」についての見解にまで遡ることによって、明らかにする。さらに Heidegger 自身による見解をもとに、その本来的なあり方、すなわち存在論的な次元におけるそのあり方について提示する。

Key Words : 世界内存在, 対話, 沈黙, 時間性

#### はじめに

Donald F. Krill による実存主義ソーシャルワーク (existential social work) は、「疎外 (alienation)」に悩むクライアントを援助するために展開された援助枠組みである。ここでいう「疎外」とは、

---

\* 人間学部人間福祉学科

すなわち、自らの「存在の意味」を把握することができず、自己が不安定な状態にあることを意味する。筆者は先にこの援助枠組みにおいて、クライアントが「疎外」に悩むことから解放されるには他者、とりわけ彼ら自身の家族や親戚、または友人といった重要な他者（significant others）との間に「緊密なつながり」を形成する必要がある、と規定していることについて明らかにした。そしてそれは、実存主義（existentialism）における鍵概念である「世界内存在（In-der-Welt-sein）」に基づいておこなわれていると考えられるのであった。この援助枠組みにおいては、クライアントと複数の重要な他者との「緊密なつながり」の形成を促すことによって、彼ら自身が自らの「存在の意味」を把握することを可能にする。つまりそれは、彼らと複数の重要な他者との間に「緊密なつながり」を張りめぐらすことによって、すでに失ってしまった共同体に代わる新たな「場」を提供していくことになるのである<sup>1</sup>。

なお Krill による実存主義ソーシャルワークの理論的支柱となっている実存主義においては、存在者（Seiendes）と存在（Sein）の区別を明確におこなっている。それにおいては「何よりも存在と存在者とを区別し、存在者と区別される存在の意味を明らかにすることをめざしている」（市倉 1986：21）。なおここでいう存在者とは「存在するもの（もの）」のことであり、一方の存在とは「存在すること（働き）」のことである。前者は「存在するからこそ我々に現前する」（同前）のであり、後者は「存在者を存在者として顕わにする条件にほかならない」（同前）。したがって Krill による援助枠組みにおける「場」とは、存在者の事象領域を表す存在的（ontisch）<sup>2</sup>な次元ではなく、あくまでクライアントという存在者の存在を解明しようとする存在論的（ontologisch）<sup>3</sup>な次元になければならないのである。

しかし Krill による実存主義ソーシャルワークにおける「場」の概念は、実際のところ、例えば存在者の次元にあると考えられるソーシャルサポート・ネットワーク論における「システム」の概念を何ら超えてはいない。ソーシャルサポート・ネットワークとは、「インフォーマルな対人関係全体と、それを場にして交換されるソーシャルサポートを意味」（松岡 2005：186）している。そしてソーシャルサポートとは、「インフォーマルな対人関係を介して交換される有益物」（同前）のことであり、さらに有益物とは、「情緒的支援、助言、情報、金銭、物品などで、資源あるいは社会資源と呼ばれる」（前掲：185）もののことであり、つまりソーシャルサポート・ネットワークは、これらの有益物が交換されることを可能にするのであり、「日常生活を営む上で直面する課題を果たしていくために必要になるさまざまな有益物」（同前）を得ることを可能にする、他者との間における「相互依存関係」（同前）のことを表しているのである。一方で Krill による援助枠組みにおいても、やはりクライアントと複数の重要な他者との間に「緊密なつながり」を張りめぐらせていくことによって「インフォーマルな対人関係」を形成し、さらにその間で「様々な交流が行なわれる」（田嶋 2004b：5）ようになることを促していく。具体的には「対話（dialogue）」という、「ことば」の交流がおこなわれることになる<sup>4</sup>。つまり最終的には、重要な他者との間における「緊密なつながり」という「相互依存関係」をもとにそれが形成され、さらにそこで「ことば」という有益物の交換がおこなわれることにな

るのである。

ソーシャルサポート・ネットワークにおいては、利用者という存在者が「日常生活を営む上で直面する課題を果たしていくため」、他者との間における「相互依存関係」を通じて、「さまざまな有益物」という存在者を獲得していくことを可能にする。つまりそれは、あくまで存在論的な次元にある援助枠組みといえるのである。そしてそれは、あくまで実証科学のうえに成り立つものとして規定されることになる<sup>5</sup>。一方 Krill による実存主義ソーシャルワークは、クライアントの「存在の意味」に焦点を当てていく。つまり、クライアントという存在者の存在を解明しようとしていく存在論的な次元にあるべき援助枠組みなのである。したがってそれにおける「場」は、ソーシャルサポート・ネットワークにおける「システム」の概念と同次元にあってはならないのである。そしてそもそも、Krill がこのように自らの援助枠組みを存在論的な次元で展開することができなかったのは、「世界内存在」という概念自体を、その提唱者である Martin Heidegger による見解に沿って忠実に摂取することができていないからである。

本稿ではまず Krill における「場」という概念が、ソーシャルサポート・ネットワーク論における「システム」の概念と同次元にあることを明らかにする。とりわけ Krill が主著 (Krill 1978) を刊行した同時期に「ライフコース研究の視点を取り入れ」(松岡 2005:192)、ソーシャルサポート・ネットワークに「時間的変化という視点」(同前)を導入した Robert Kahn と Toni Antonucci による「コンボイ」概念を取り上げ、その上で Krill によって提示されたものとそれが同様に、存在論的な次元にあることを明らかにする<sup>6</sup>。次に Krill における「場」の概念がその次元に止まっている理由を、Heidegger 自身による「世界内存在」についての見解にまで遡ることによって、明らかにする。さらにこれらの考察の結果を踏まえ、Krill における「場」の概念の本来あるべきあり方について論じる。なお Krill による実存主義ソーシャルワークの先行研究は、西光によるもの (1982)<sup>7</sup>と信川によるもの (1998)<sup>8</sup>が挙げられるが、どちらもそれを概観することのみを目的としている。したがって直接的な意味で、本稿と同様の志向を持った先行研究は存在していない。

## I. Krill における「場」の概念と「コンボイ」概念の比較検討

Kahn と Antonucci はライフコース研究の成果をもとに、ソーシャルサポート・ネットワークに「時間的変化という視点」を取り入れることによって、「『コンボイ』の概念を提示」(松岡 2005:192)した。なおここでいう「コンボイ」とは、すなわち「護衛艦」(藤崎 1998, p. 15)のことである。

この「コンボイ」という概念が表しているのは、「多様な関係性における役割の起源 (role origins)」(Kahn & Antonucci 1981:396)であり、そしてそれは個人を中心とした「複数の同心円」によって表される。その構成内容は「ライフコースの変遷に伴って変化していくが、その人の持つ『役割』に関連して変化しやすい部分と『役割』にほとんど依存せず安定的にコン

ボイのメンバーとしてとどまり続ける部分に分かれる」（松岡 2005：192）ことになる。まずこの「複数の同心円」において、もっとも個人に近い円の部分は「個人に非常に近い人びとによって構成される。そしてそれはその人にとって、もっとも重要なサポートの提供者であると考えられる」（Kahn & Antonucci 1981:398）のである。つまり、その個人がどのような「役割」に就こうが変化しにくく、安定したサポート源になり得ることになる。その一方でもっとも遠い円の部分は、「その人にとって近いとはいえないものの、それにもかかわらずサポートを生み出す源」（ibid：396）といえるものである。そしてそれは職場における地位などに密接に関連しており、「その地位に就かないと発生しないという形で『役割』に強く依存した関係」（松岡 2005：192）にある。つまりライフコースの変遷によって、個人をサポートする役割を担う者は「役割関係に直接拘束された」（藤崎 1998:17）もっとも遠い円から、「役割依存的でない、それゆえ長期にわたる安定的な関係を意味する」（同前）もっとも近い円へと次第に移行していくことになる。この「コンボイ」という概念は、「個人の環境に存在するサポート源は人のライフコースの移り変わりに応じてたえず変化していく動的な存在であること」（松岡 2005：192 - 193）を明らかにした点で、「非常に大きな」（前掲：193）意義があったと考えられている。

次に Krill による実存主義ソーシャルワークにおける「場」の概念についてであるが、それはすなわち、以下のように説明されるのであった（田嶋 2004b：6 - 8）。

Krill においては、クライアントと複数の重要な他者との「緊密なつながり」の形成を促すことによって、彼らが自らの「存在の意味」を把握することを可能にする。つまりそれは、彼らと複数の重要な他者との「緊密なつながり」を張りめぐらせることによって、すでに失ってしまった共同体に代わる新たな「場」を提供することにより、自らの「存在の意味」を把握することができるようにしていくのである。そして彼自身は、この「場」を以下のように図式化していた（Krill 1978：101）<sup>9</sup>。



図1 Krill による「場」

図における中央の陰陽のシンボルは、クライアントの内面にある叡智を表している。これは彼らのニーズや潜在能力、そして、これから解決していく必要のある課題の複合体である。この叡智は自我に内在化されている。またこの自我には、自らを防衛する心象が具わっており、

自我のアイデンティティの保持を司っている。彼らは、これら3つの層（叡智・自我・自我を防衛する心象）によって成り立っていると考えられるのである。さらにその周囲には、重要な他者が存在している。これは、彼らにとっての二人称的世界（「あなた」と呼び表される人びとによって構成される世界）である。その外周には、重要な他者には含まれない他者や自然、物質、そして観念などが存在している。これは、彼らにとっての三人称的世界（「彼、彼女、それ」と呼び表される人びとやものによって構成される世界）である。彼らは、複数の重要な他者（二人称的世界）と「緊密なつながり」を張りめぐらすことによって、他者や自然、物質、そして観念（三人称的世界）とのつながりを獲得する。このように、彼らを中心に二人称的世界と三人称的世界が広がっていく地平を、Krillは「場」として表現したのである。そしてそれは「世界内存在」という概念を、彼自身が独自に表現し直したと考えられるのである。

KahnとAntonucciによる「コンボイ」概念は、あくまでソーシャルサポート・ネットワーク論の系譜に属するものであり、したがってそれは個人（利用者）という存在者が「日常生活を営む上で直面する課題を果たしていくため」、他者との間における「相互依存関係」を通じて「さまざまな有益物」という存在者を獲得していくことの必要性を表している。つまりそれは、あくまで存在者の事象領域を表す存在的な次元にあり、かつそれはあくまで実証科学のうえに成り立つと考えられるのである。その一方でKrillによる援助枠組みは、確かに「世界内存在の概念に基づいた存在論（ontology）の立場」（田嶋2004b：8）から展開しようとしているというものの、やはりクライアントと複数の重要な他者との間に「緊密なつながり」を張りめぐらせていくことによって「インフォーマルな対人関係」を形成し、さらにその「場」において「対話」という「ことば」の交流がおこなわれることを促していくことになる。つまり、クライアントと重要な他者という存在者同士の間には「緊密なつながり」という「相互依存関係」を形成し、さらにそこで「ことば」という存在者の交換がおこなわれることを促していくのである。したがってKrillによるものも同様に、やはり、あくまで存在者の事象領域を表す存在的な次元にあるといえるのである<sup>10</sup>。

確かにKrillはクライアントの「あり方」について、彼独自の見解を示してはいる。先にも述べたように、彼はクライアントという個人が3つの層（叡智・自我・自我を防衛する心象）によって成り立っていると考え、周囲には重要な他者が存在し、さらにその外周にはそれには含まれない他者や自然、物質、そして観念などが存在していると考えたのであった。しかし彼自身におけるこのような見解は、あくまでクライアントという存在者について述べているに過ぎないのであり、したがってそれは存在的な次元を少しも超えることができていないのである。

Krillにおける「場」の概念は、彼が主著を刊行した同時期に展開されたKahnとAntonucciによる「コンボイ」概念と同様に、存在的な次元にある。かつ内容的にも、「ライフコース研究の視点を取り入れ」ソーシャルサポート・ネットワークに「時間的変化という視点」を取り入れたその概念にはるかに及んでいない。Krillによる概念は、クライアントという存在者が「いかにあるか」を問う存在的な次元ではなく、あくまでそれをそれとして顕わにする条件の

意味を問う存在論的な次元になければならない。

## Ⅱ．「世界内存在」と Krill による「場」の概念

ここでは、Krill による援助枠組みにおける「場」の概念が存在的な次元に止まっている理由を、「世界内存在」という概念の提唱者である Heidegger 自身によるそれについての見解にまで遡ることによって、明らかにする。

### A．「世界」および「世人」について

クライアントを含め人間、すなわち現存在（Dasein）は、全て「世界内存在」として存在している。そしてそれは、自分自身のあり方に対して、気遣う存在者である。かつそのようなものとして、自分自身を了解している存在者である。現存在は、つねに自分自身のあり方を問うという仕方<sup>1</sup>で存在する「現実存在＝実存（Existenz）」なのである。

「実存」する現存在からすれば、「世界」は決して客観的に存在しているわけではなく、いつでもすでに発見されている。そして現存在は、それ自体で自立している（あるいは孤立している）存在者ではなく「共現存在」、すなわち他者とともに互いに存在を規定し合いながら存在している。「世界」は、「そのつどすでにつねに、私が他者たちと共に分かち合っている」（ハイデガー 2003a：307）のである。

Heidegger によると現存在は、日常的に平均的な存在了解（自分自身についての了解）をもつが、彼はこのような存在のあり方を世人（Das Man）と呼ぶ。そしてこの世人としての現存在は、懸隔性（Abständigkeit）、平均性（Durchschnittlichkeit）、均等化（Einebnung）という、3つの存在のあり方をとっているという。懸隔性とは現存在が、他者に比べて立ちおくらせているため、「他者たちへと態度をとる関係のうちでその遅れを取りもどそうとすること」（前掲：326）や「他者たちに対して優位を保ちながら、他者たちを押えつけることをねらうこと」（同前）を意味する。平均性とは現存在が、「当然とされているもの、ひとが通用させたりさせなかったりするもの、ひとが成果を是認したり否認したりするもの、そうしたものの平均性のうちにおのれを保持している」（前掲：328 - 329）ことを意味する。均等化とは現存在が、先に挙げた平均性をもとに、「でしゃばってくるあらゆる例外を監視する」（前掲：329）ことを意味する。Heidegger は、世人としてのそれにおけるこれら3つの存在のあり方を、公共性（Öffentlichkeit）と呼んでいる。世人は、この公共性という存在のあり方<sup>2</sup>をとりつつ、「その日常性におけるそのときどきの現存在の責任を免除する」（前掲：330）。つまり、自分自身の本来的な存在のあり方から逃避することによって、「誰でもない者」（前掲：331）に成り下がっているのである。

### B．「内存在」について

先にも述べたように「実存」する現存在からすれば、「世界」は決して客観的に存在してい

るわけではなく、むしろいつでもすでに発見されているものとして捉えられるのであった。そして「世界内存在」における「内存在」とは、現存在が「世界」のうちを生きるという存在のあり方を言い表している。

「世界」は、現存在としての人間が、「いま - ここ」に存在するからこそ開示されるものである。現存在における「現 (Da)」とは、すなわち「世界」が開示される起点である。このように「世界」は「現」によって開示されるのであるが、同時にそのうちに生きる「内存在」のあり方をも開示する。つまり「現」という表現には、「おのれ自身が明みである」(ハイデガー 2003b: 8) ことが言い表されているのであり、それこそが「世界」と「内存在」を開示することになるのである。

「内存在」の分析は、現存在における「現」の本質を取り出すことによって可能となる。実際のところそれからは、情状性 (Befindlichkeit)、了解 (Verstehen)、そして語り (Rede) という3つの本質を取り出すことができる。

Heideggerによれば一つめの情状性が、「現」の本質をもっとも端的に表しているという。つまりそれは、存在的には「最も熟知で最も日常的なもの、つまり、気分とか、気分的に規定されていること」(前掲: 12) と言い表すことができるものであり、それを存在論的に表現するならばこのように(情状性と)表されることになる。現存在という性格をもった存在者(すなわち人間)は、この情状性において、つねに自分自身に当面している。つまり、気分的に規定された情状のうちにあるものとして、自分自身を見出してしまっているのである。このことは、彼らが「被投性という情状のうちにあるという在り方」(前掲: 15)にあることを意味する。

現存在は自分自身を、すでに気分的に規定された情状のうちにあるものとして見出している。つまり現存在は、それにおいてすでに了解が生じているのであり、したがって情状性と了解の両者は、「等根源的」(前掲: 32)といえるのである。また了解は、現存在が自らの存在を、諸可能性をめぐりて企投するモメント (契機)となるものである。「諸可能性へとかわるこうした了解しつつある存在は、それらの諸可能性が開示されたものとして現存在のうちへと反転することによって、それ自身一つの存在しうることになる」(前掲: 47)のであり、「了解の企投するはたらきは、おのれを完成するという固有の可能性をもっている」(同前)のである。Heideggerは、この了解の完成を解釈と名づけている。またこの解釈の派生的様態として、陳述を挙げることができる。これはすなわち、解釈されたことを他者に提示し伝達することによって、「共に見えるようにさせる」(前掲: 64)ことである。

最後に語りであるが、これは現存在における「現」の本質として、情状性、了解とともに「等根源的」(前掲: 78)である。現存在は、自分自身をすでに気分的に規定された情状のうちにあるもの(情状性)として見出している、すなわち了解しているのであった。これは、彼らが自ら語ることを通しておこなわれることになる。したがって語りは、情状性や了解とともに「等根源的」なのである。

Heideggerによると語りには、「聞くこと (Hören) と沈黙すること (Schweigen) とが可能性と

して属している」(前掲:79)。語りは、それそのものだけで成立するものではない。それに応じた働き、すなわち聞くことが属していなければならぬのである。つまり「語りに応じた了解する働き、いわば語りの自己了解としての聞く作用があつて初めて、語りは十全なものとなる」(寺邑 1980:125) のである。さらにそれには、沈黙することが可能性として属している。それは、決して何も言うことを持たないのではなく、「言うべき何ごとかをもっていなければならない」(ハイデガー 2003b:86)。Heidegger によれば、「たがいに共に語りあつてるとき沈黙している人は、言葉のつきない人よりもいっそう本来的に、『了解させるように暗示する』ことができる、言いかえれば、了解内容を完成することができる」(前掲:85) という。語りには、聞くことと沈黙することが属しているのであり、とりわけ後者は、語っている当人に対してその了解内容を完成させることを可能にするのである。

### C. 空談と沈黙、そして時間性

Heidegger は「世界内存在」としての現存在が、日常的には、その本来的なあり方から逃避した非本来的な状態にあると考えていた。したがって、先に挙げた現存在における「現」の本質の1つである語りについても、その非本来的なあり方である空談と化していると考えた。そしてそれは、日常的にわれわれが話しているもののことを意味している。われわれはたいていの場合、使用している言語を「世間に流通する既製の解釈のパターン、被解釈性に依拠」(寺邑 1980:127) しながら用いている。日常的な現存在は、「大抵そうした平均的な了解の型へと委ねられている」(同前) のである。

語りは、情状性や了解とともに「等根源的」であつた。つまりそれは、自らのあり方(情状性)を了解および解釈し、さらにそのうえで陳述するものなのであり、本来的に、自らを他者に開放するものである。しかし日常的に非本来的な状態にある現存在は、自らを他者に開放するものとしてのそれを持たない。彼らは、他の人びとが話している内容を「語り広め、語りまねる」(ハイデガー 2003b:96) だけである。彼らが話している内容は、決して、彼ら自身のなかから自ら紡ぎ出しているわけではない。それは「すでに最初から地盤のうえに生え抜いていなかった」(同前) だけでなく、そのような「語り広め、語りまね」によって「完全に地盤を失うまでにいたる」(前掲:96-97)。ここに、「空談が成立する」(前掲:97) ことになる。

現存在は「世界内存在」として存在しており、その「世界」は「そのつどすでにつねに、私と他者たちと共に分かち合っている」。つまり「日常的に平均的な存在了解」をもっている世人として存在しているのであり、差しあたってはまず「誰でもない者」に成り下がっている。彼らが、このような非本来的なあり方から本来的なそれへと変わっていくためには、良心(Gewissen)が必要となる。そしてそれは、呼び声(Ruf)として性格づけられることになる。この呼び声は、彼らが「おのれ固有の自己」(前掲:343)を目指すようそれ自身に呼びかけるのであり、しかもそれは「まったく声に出して口外することを無しですます」(前掲:345)。「ひたすら不斷に沈黙という様態において語る」(同前) のである。そして、現存在が自らのもつ

とも固有な自己をめがけて自らを企投 (Entwurf) することを、決意性 (Entschlossenheit) という。さらにそれは自らのもっとも固有な存在可能、すなわち自らの「死」に向かって先駆 (Vorlaufen) することになる。「死」こそは、各々の現存在によってのみ引き受け得る固有の可能性であり、決意性は先駆するそれとなって、すなわち先駆的決意性となってはじめて、「現存在の最も固有な存在しうることへとかかわる根源的な存在となる」(ハイデガー 2003c: 13) ののである。

そもそも決意性、さらに先駆的決意性は、良心の呼び声によって可能となるのであり、そしてその呼び声は沈黙という様態において語るのであった。現存在が非本来的なあり方から本来的なそれへと、すなわちもっとも固有な存在可能へ向かう根源的な存在となるためには、沈黙が必要となるのである。つまり、彼らが他の人びとの話している内容を「語り広め、語りまねる」だけの空談を抑え、沈黙のなかに止まることができるようになったとき、初めて本来的なあり方にあることが可能になるのである。

現存在は沈黙において、良心の呼び声によって呼びかけられる。それによって、自らのもっとも固有な自己をめがけて自らを企投する決意性、さらには自らの「死」に向かって先駆する先駆的決意性となっていく。「おのれの死へと先駆しつつ、おのれの最も固有な、単独化された被投性 (Geworfenheit) へと復帰する」(細川 1980: 206) のである。さらには「おのれの状況を偽りなく本来的に目差し、その中へと入り込もうとする」(同前) ようになる。なお被投性とは、現存在が「その現へといわば受動的に投げ入れられている」(寺邑 1980: 105) ことである。この先駆しつつ被投性へと復帰し、さらにおのれの状況を本来的に目差しという時間性 (Zeitlichkeit) こそが、すなわち現存在の「存在の意味」である。死へとかかわりかつ被投性を引き受けながら、他者や他の存在者を「偽りなく出会わせる」(三富 1980: 194) この時間性こそが、現存在という「存在者を存在者として顕わにする条件」の意味に他ならないのである。

#### D. Krill による「場」の概念が存在的な次元に止まっている理由

Krill による援助枠組みは、確かに「世界内存在の概念に基づいた存在論の立場」から展開しようとしてはいる。そしてそもそもそれは「疎外」に悩む、すなわち自らの「存在の意味」を把握することができず、自己が不安定な状態にあるクライアントを援助するために展開されたのであった。ここでいう自己とは「意識される自分」、すなわち客体である。Krill によればこの状態にあるクライアントは、自我に囚われた状態 (entrapment of the ego) にあるという (Krill 1978: 44)。ここでいう自我とは「意識する自分」、すなわち主体である。Krill はここに「主体と客体の分裂」という事態があると考えたのであり、さらにはそこに「人間の統一性と全体性を破壊する傾向」(パッペンハイム 1960: 19) を見出すことになったのである。そこで彼は、この分裂を払拭しようとした実存主義に注目し、さらにはそれにおける鍵概念である「世界内存在」をもとに自らの援助枠組みを展開していった。人間は「何よりも世界内存在であり、他の存在者とかかわることなしには存在しえない」(市倉 1986: 20) のであり、「他の存在者と

の交渉においてしか存在しないということは、人間が自分の存在の中に自分ならざる存在者を含むということであり、自己完結的な存在者ではない」（同前）のである。したがって Krill は、クライアントと複数の重要な他者との「緊密なつながり」の形成を促すことによって、すなわち新たな「場」を提供することによって、彼らが「世界内存在」としての本来的なあり方を取り戻し、自らの「存在の意味」の把握を可能なものにしようとしたのである<sup>11</sup>。

しかし実際のところ Krill は、自らの「場」の概念を、「世界内存在」としての人間が「自分の存在の中に自分ならざる存在者」を含んでおり、したがって「自己完結的な存在者ではない」、すなわち「他者とともに互いに存在を規定し合いながら存在している」ことにのみ焦点を当てて展開している。つまりこれまで述べてきたような、Heidegger 自身による存在者の存在を説明しようとする存在論的見解を忠実に摂取した後に、展開していつているわけではないのである。結果として Krill による「場」の概念は、その次元に到達することなく、先に挙げた「コンボイ」概念と同様に存在的な次元に止まることになってしまったのである。

### Ⅲ． Krill による「場」の概念の本来的なあり方

Krill による「場」の概念は、クライアントという存在者が「いかにあるか」を問う存在的な次元ではなく、あくまでそれをそれとして顕わにする条件の意味を問う存在論的な次元になければならない。つまり、彼ら自身が「先駆しつつ被投性へと復帰し、さらにおのれの状況を本来的に目差す」時間性を把握することを可能にするものでなければならないのである。そしてそれこそが、その本来的な「あり方」と考えられるのである。

クライアントという存在者の「存在の意味」すなわち時間性は、自らの「死」に向かって先駆する先駆的決意性において把握されるのであり、そしてそれは良心の呼び声によってもたらされるのであった。またこの呼び声は、「ひたすら不断に沈黙という様態において語る」のであった。つまり「存在の意味」であるところの時間性とは、すなわち、沈黙の様態において把握されると考えられるのである。

先にも述べたように Heidegger は、沈黙することは決して何も言うことを持たないのではなく、「言うべき何ごとかをもっていなければならない」のであり、さらには「たがいに共に語りあっているとき沈黙している人は、言葉のつきない人よりもいっそう本来的に、『了解させるように暗示する』ことができる、言い換えれば、了解内容を完成することができる」と考えていた。このことをクライアントとソーシャルワーカーの間における「対話」に当てはめてみた場合、後者は前者に対して、あえて何も語らないことによって両者の間に沈黙を生み出し、さらにはそれによって前者が自らの「存在の意味」を本来的に了解する、すなわち良心の呼び声によって、先の時間性を把握できるよう仕向けていくことになると考えられることになる。しかし沈黙という様態は、必ずしも Heidegger が考えているように言うべき何ごとかをもっているから可能となるものではないのであり、さらにそれは「いっそう本来的に、『了解させる

ように暗示する』とは限らないのである。

古荘真敬によれば、Heideggerにおけるこのような意図的な沈黙は、ごく稀な「教師然としたタイプの人間が用いるレトリックとして現われる」（古荘 2002：185）ケースに過ぎないという。それをさも「弁論的な技術の一種であるかのように分析するハイデガーのミスリーディングな叙述は、いずれにせよ、批判的に改訂されなければならない」（同前）のである。

語りには「聞くことと沈黙することが可能性として属している」のであったが、われわれが他者との間で「対話」をおこなっているとき、それら両者の間で具体的におこなわれるのは、すなわち「語ること」、「聞くこと」そして「沈黙すること」の3つである<sup>12</sup>。一方が語っているとき他方は必ず聞いているのであり、両者がともに語りも聞きもしなくなった場合、沈黙が生じることになる。聞いている者は、他方が語っている内容を「黙って聞いている」のであり、「聞くこと」のなかには「本質的な契機として、相手に発言の機会を譲る」という意味での『沈黙』が含まれている」（前掲：184-185）のである。一方が語り始めると、他方は語るのを止め、聞くことに集中する。そして他方が語り始めると、一方が語ることを止め、聞くことに徹する。つまり「対話」においては、互いに沈黙し合うことによって、互いが語る機会を譲り合っているのである。しかし一方が語るのを止め、他方にその機会を譲った場合、仮に譲られたほうが何も語らないとすれば、そのとき沈黙が生じることになる。

われわれは「対話」という状況において、相手に無理に発言させるわけにはいかない。「聞く」ことができるようになるためには、相手が何かを語り出すことを待たなければならないのである。それはあくまで相手の「自由」であり、われわれは「ただ待つことしかできない」（前掲：186）。そして多くの場合、その相手は期待されつつも、「言葉に詰まって”沈黙せざる”」（前掲：185）を得なくなる。返す「ことば」が見つからず、そうせざるを得ないのである。このとき「対話の渋滞」（同前）が生じるのであり、まさに沈黙の様態が現れ出ることになる。

クライアントはソーシャルワーカーとの「対話」を通じて、自らの「ことば」を連綿と、もしくは途切れがちに「語ること」になる。後者はそれに対して、じっくりと耳を傾けていく。つまり、「聞くこと」に徹していくのである。さらに、それに対して何らかの見解を「語ること」になる。その際に前者は、後者の「ことば」に耳を傾ける。つまり、「聞くこと」に集中していくのである。しかし、前者が抱えている課題が深刻であればあるほど、次第に後者の口から「ことば」が出にくくなる。さらには、「言葉に詰まって”沈黙せざる”」を得なくなる。期待されつつも、前者に返す「ことば」が見つからず、そうせざるを得ないのである。このとき「対話の渋滞」が生じ、沈黙の様態が出現する<sup>13</sup>。

Krillによる「場」の概念は、クライアントという存在者が「いかにあるか」を問う存在的次元ではなく、あくまでそれをそれとして顕わにする条件の意味を問う存在論的な次元になければならないのであった。そしてその意味とはすなわち時間性であり、さらにそれは、自らの「死」に向かって先駆する先駆的決意性において把握されることになる。またそれは良心の呼び声によってもたらされるのであり、その呼び声自体は沈黙の様態において把握されるので

あった。さらにこの様態は、クライアントとソーシャルワーカーの「対話」において、前者の抱えている課題が深刻であって、後者が前者に返す「ことば」が見つからず「対話の渋滞」が生じたときに出現することになる。

Krill における実存主義ソーシャルワークにおける「場」の概念の本来的なあり方とは、すなわちクライアントとソーシャルワーカーの「対話」において、後者が前者に返す「ことば」が見つからず、沈黙の様態が生じた状態に他ならない。それはつまり、後者が有する高い専門性にも拘らず、前者に何ら語ることのできない状態が生じたときのことであると考えられるのである。このとき前者は、良心の呼び声によって「おのれ固有の自己」を目指すよう、彼ら自身に呼びかけることになる。そして彼らは、自らの「死」に向かって先駆する先駆的決意性となり、「先駆しつつ被投性へと復帰し、さらにおのれの状況を本来的に目差す」時間性を把握する。つまり彼ら自身が自らの「存在の意味」を把握する、すなわち「疎外」に悩むことから解放されるのである。またこの「場」の概念は、先に挙げた存在的次元にある「コンボイ」概念とは異なっているのであり、あくまで存在者の存在を解明しようとする存在論的な次元にあると考えられるのである。

### おわりに

本稿では、Krill による実存主義ソーシャルワークにおける「場」の概念が「コンボイ」概念と同様に存在的次元にあることを明らかにし、その上で Heidegger 自身による「世界内存在」の見解にまで遡ることによって、それがその次元に止まってしまっている理由について明示した。さらにそれらの内容を踏まえ、Krill における「場」の概念の本来的なあり方、すなわち存在者の存在を解明しようとする存在論的な次元におけるあり方について論じていった。

クライアントが自らの「存在の意味」を把握する、すなわち「疎外」に悩むことから解放されるのは、彼らとソーシャルワーカーにおける「対話」において、後者が有する高い専門性にも拘らず、後者が前者に何ら語ることのできない状態が生じたときである。そしてそれは、クライアントによってのみ引き受け得る固有の可能性、つまり彼らが自らの「死」に直面したときであると考えられるのである<sup>14</sup>。

### 注

<sup>1</sup> この段落における記述は、筆者による論文の内容（田嶋 2004b：1 - 12）に基づいている。

<sup>2</sup> 「存在的」とは、存在者の事象領域を表すものである。存在的な問いは、そこでの諸事情の知見を増大させる問いかけを遂行する。その遂行をもとに、歴史、自然、空間、生命、言語等々といった種々の実証諸科学が成り立つことになる（渡辺 1980：25）。

<sup>3</sup> 「存在論的」とは、存在者の存在を解明しようとすることを表すものである。存在者の事象領域の解明よりも、その存在を解明する存在論的な問いこそが、より根源的な問いである（前掲：25 - 26）。

<sup>4</sup> Krill による援助枠組みにおいては、おもに「対話の必要性（necessity of dialogue）」という治療概念

- (therapeutic concept) に基づいて援助が展開されることになるのであり (田嶋 2004a : 54 - 57), 最終的には援助者ではなく, 重要な他者との間で「対話」がおこなわれるようになることを目指していく.
- <sup>5</sup> Lambert Maguire によれば「ソーシャルサポートシステム介入の経験的基礎は, 疫学的調査と社会踏査的調査, ならびに多様なネットワーク分析技法をともなう」(マグワエア 1994 : 44) という. つまりソーシャルワークサポート・ネットワークは, あくまで科学的調査や科学的分析といった実証科学に基づいているのである.
- <sup>6</sup> 「コンボイ」概念が Krill による「場」の概念と同時期に提示されていたということは, Krill による概念に, 必ずしも先見性や独自性があったわけではないことを表している.
- <sup>7</sup> 西光義敏 (1982) 「米国における実存主義的ソーシャルワーク」龍谷学会編『龍谷大学論集』421, 2 - 23.
- <sup>8</sup> 信川美樹 (1998) 「実存主義ソーシャルワーク研究 : D. F. クリルの Existential Social Work を中心に」同志社大学社会福祉学会編『同志社大学社会福祉学』12, 103 - 115.
- <sup>9</sup> なお下記の図は, Krill によって記されたものを, 筆者自身が和訳したものである (田嶋 2004b : 6).
- <sup>10</sup> 実際に Krill は, 個人 (叡智・自我・自我を防衛する心象) の周囲に存在する「重要な他者」を, significant - other system (S - O - S) というように, 「システム」と表現している (Krill 1978 : 101).
- <sup>11</sup> この段落における記述は, 筆者による論文の内容 (田嶋 2004b : 4 - 8) の内容に基づいている.
- <sup>12</sup> 古荘は「私たちが相互に行う『対話』をゲームに譬えるならば, このゲームにおいてひとが打つことのできる手は, 『発話すること』『聴くこと』そして『沈黙すること』の三種類であると形式的に捉えることができる」(古荘 2002, : 183) と述べている.
- <sup>13</sup> この段落の記述については, 筆者による論文の内容 (田嶋 2007 : 32 - 33) の内容に基づいている.
- <sup>14</sup> この「死」に直面したクライアントとソーシャルワーク (もしくはソーシャルワーカー) のあり方については, 筆者による論文 (田嶋 2008 : 1 - 19) において論じられている.

## 引用文献一覧

- 藤崎宏子 (1998) 『高齢者・家族・社会的ネットワーク』培風館.
- 古荘真敬 (2002) 『ハイデガールの言語哲学 : 志向性と公共性の連関』岩波書店.
- Heidegger, M. (1927) *Sein und Zeit*. Max Niemeyer. (= 2003a, 原佑・渡邊二郎訳『存在と時間Ⅰ』中央公論新社; 2003b, 原佑・渡邊二郎訳『存在と時間Ⅱ』中央公論新社; 2003c, 原佑・渡邊二郎訳『存在と時間Ⅲ』中央公論新社.)
- 細川亮一 (1980) 「現存在と時間性 (その2)」渡辺二郎編『ハイデガー「存在と時間」入門』有斐閣, 199 - 247.
- 市倉宏祐 (1986) 『現代フランス思想への誘い : アンチ・オイディプスのかなたへ』岩波書店.
- Kahn, R. & Antonucci, T. (1981) Convoys of social support : A life-course approach. Kiesler, S. B. (eds.), *Aging : Social change*. Academic Press, 383 - 405.
- Krill, D. (1978) *Existential social work*. The Free Press.
- Maguire, L. (1991) *Social Support System in Practice : A Generalist Approach*. National Association of Social Workers. (= 1994, 小松源助・稲沢公一訳『対人援助のためのソーシャルサポートシステム』川島書店.)
- 松岡克尚 (2005) 「ソーシャルサポート・ネットワーク」久保絃章・副田あけみ編『ソーシャルワークの実践モデル』川島書店, 185 - 204.
- 三富 明 (1980) 「現存在と時間性 (その1)」渡辺二郎編『ハイデガー「存在と時間」入門』有斐閣, 151 - 198.

Pappenheim, F. (1959) *The alienation of modern man*. Monthly Review Press. (= 1960, 粟田賢三訳『近代人の疎外』岩波書店.)

田嶋英行 (2004a) 「D. F. Krill による実存主義ソーシャルワークの援助の枠組み」 ソーシャルワーク研究所編『ソーシャルワーク研究』 29 (4), 52 - 58.

田嶋英行 (2004b) 「D. F. Krill による実存主義ソーシャルワークにおける課題:『疎外』の問題とその対応」 日本社会福祉実践理論学会編『社会福祉実践理論研究』 13, 1 - 12.

田嶋英行 (2007) 「D. F. Krill による実存主義ソーシャルワークの批判的検討: 援助枠組みの『限界』とその乗り越えの可能性」 文京学院大学総合研究所編『文京学院大学人間学部研究紀要』 9, 17 - 36.

田嶋英行 (2008) 「D. F. Krill による実存主義ソーシャルワークの今日的意義:『死』の局面におけるソーシャルワークとクライアントの『存在の意味』の追求」 文京学院大学総合研究所編『文京学院大学人間学部研究紀要』 10, 1 - 19.

寺邑昭信 (1980) 「現存在の予備的な基礎的分析 (その2)」 渡辺二郎編『ハイデガー「存在と時間」入門』 有斐閣, 95 - 150.

渡辺二郎 (1980) 「『存在と時間』の基本構想」 渡辺二郎編『ハイデガー「存在と時間」入門』 有斐閣, 1 - 52.

(2009.9.25 受稿, 2009.10.22 受理)